

「ジルコニアオールセラミックスの長期予後を安定させるためのチェアサイド、ラボサイドの役割」

むとベデンタルクリニック院長 六人部 慶彦

<抄録>

患者の顎口腔の審美性に対する要求が高まり、前歯部のみならず臼歯部においても天然歯に近似した形態と色調を持つ審美修復処置が求められるようになってきた。近年、色調および光透過性をより一層天然歯に近づけた、高強度のオールセラミッククラウンがその修復材料として臨床応用されるようになってきている。最近のオールセラミックシステムとして、CAD/CAM を用いたジルコニアが主流となりつつあり、世界でも 100 を超えるシステムが登場し審美修復治療発展の一助となっている。ジルコニアは、高い曲げ強度と破壊靱性値を有しており、強度的な信頼性が高まることにより、適応範囲も格段に広がりを見せている。健康的で美しい口腔、笑顔を回復し、予知性をもって維持させるためには、一種の職人である我々歯科医師、歯科技工士双方が熟練された技術を駆使して医療に携わり、明確に情報を伝達し合うことが重要である。ただ優秀な歯科技工士が製作する美しいセラミック修復物にすべてを委ねているだけでは、審美修復治療における長期的に良好な予後は期待できない。本講演会では、オールセラミッククラウンを臨床応用し、長期的な予後を安定させるためにチェアサイドにおける歯周組織に調和したプロビジョナルレストレーションの重要性、左右の gingival level の対称性を目的に行うプロビジョナルレストレーション subgingival contour の調整法、クラウン形態（隣接面歯頸部の歯肉縁下・歯肉縁上付近の形態）、CAD/CAM により作製されるジルコニアフレームを緊密に支台歯と適合させるための従来とは少し異なった支台歯形成デザインおよびフィニッシュラインの設定位置などについて言及し、審美修復治療を成功させるために歯科医師、歯科技工士が果たすべき役割について、臨床例を中心に私見を述べたい。